

幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究 (3)

—情動発達と ADHD 傾向との関連—

○平川久美子 (石巻専修大学)
本郷一夫 (東北大学)

高橋千枝 (東北学院大学)
飯島典子 (宮城教育大学)

キーワード：情動発達，行動特徴，幼児

問題と目的

本研究は、幼児期から児童期における情動発達のアセスメント・スケールを開発することを目的とした研究の一部である。研究 3 では、研究 2 で抽出された 2 つの行動特徴のうち ADHD 傾向に着目し、幼児期における情動発達と ADHD 傾向との関連を明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 調査対象：研究 1 に同じ。研究 3 において情動発達と ADHD 傾向との関連を明らかにするにあたり、研究 2 で抽出された「ADHD 傾向」の 11 項目を用いて、それらの項目の平均得点が 4 未満を ADHD 傾向低群 (n=969)、4 以上を ADHD 傾向高群 (n=99) として群分けを行った。
2. 調査時期：研究 1 に同じ。
3. 調査内容：研究 1 に同じ。

結果と考察

1. 情動の領域別得点と ADHD 傾向との関連

7 つの領域別得点について、ADHD 傾向低群と ADHD 傾向高群との間の差を検討するために *t* 検定を行った。その結果、〈誇り・恥〉を除く 6 つの領域について有意差がみられた (Table 1)。〈表現 (表情)〉〈表現 (言葉)〉〈過敏さ〉の得点は ADHD 傾向高群のほうが有意に高く、〈抑制〉〈理解〉〈共感〉の得点は ADHD 傾向高群のほうが有意に低かった。

2. 情動の項目別得点と ADHD 傾向との関連

20 の項目別得点について、ADHD 傾向低群と ADHD 傾向高群との間の差を検討するために *t* 検定を行った。その結果、16 項目について有意差が

みられた。この中でも、ADHD 傾向低群と ADHD 傾向高群の間で項目別得点の差が大きかった上位 5 項目を Table 2 に示した。

Table 1 および Table 2 の結果より、①ADHD 傾向の高い子どもは表情や言葉による表現、抑制、理解、共感、過敏さなど情動発達の様々な側面において遅れがみられること、②とりわけ否定的情動を抑制したり、表情や言葉で適切に表現したりすることが難しいことが示唆された。

付 記

なお、本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 「幼児期・児童期の情動発達アセスメント・スケールの開発と保育・教育への応用」(研究代表：本郷一夫) の助成を受けて行われた。

Table 1 領域別得点

領域	ADHD 傾向 低群	ADHD 傾向 高群	<i>t</i> 値
表現(表情)	4.08	4.54	7.13***
表現(言葉)	3.84	4.29	5.81***
抑制	2.68	1.96	10.22***
誇り・恥	3.75	3.82	0.77
理解	3.89	3.59	3.08***
共感	3.29	2.86	4.85***
過敏さ	2.58	3.14	5.84***

p*<.05, *p*<.01, ****p*<.001

Table 2 項目別得点の差が大きかった項目 (上位 5 項目)

領域	項目	ADHD 傾向 低群	ADHD 傾向 高群	<i>t</i> 値
過敏さ	E19 ちょっとしたことで嫌な顔をする	2.59	3.71	9.79***
抑制	E8 怒っている気持ちを抑える	2.80	1.95	9.54***
抑制	E9 悲しい気持ちを抑える	2.82	2.06	8.41***
表現 (表情)	E2 怒っていることを表情で表現する	3.87	4.53	8.28***
表現 (言葉)	E5 怒っていることを言葉で表現する	3.70	4.33	6.67***

p*<.05, *p*<.01, ****p*<.001